

祖父母の知らない幼少年期と青年期の世界

The World of Children and Adolescents

デイビッド・エルカインド著、水田聖一*訳

David Elkind, Seiichi Mizuta

【解題】少子高齢化社会になり、祖父母が孫の世話をするという現象が一般化してきている。祖父母は自分が子どもであったことを忘れて、子どもに対して間違った接し方をしてしまうことがある。幼児期、少年期、青年期それぞれの発達段階を知ることが祖父母と孫との軋轢を緩和するのに役立つだろう。今から30年ほど前にこの問題について警鐘を鳴らしていたエルカインドの卓見にはただ驚くばかりだ。

キーワード：祖父母の子育て、発達段階、幼少年期、青年期

序論

「おじいちゃん。いつか私のことを愛さなくなることがあるの」と祖父の膝の上に座っている4歳の女の子は、困ったような声で尋ねた。「愛しい子よ、もちろんそんなことはないよ。一体全体、どうしてそんなことを思ったの」と祖父は言った。ほっとしたため息をつき、「お父さんはお母さんを愛せなくなって、離婚してしまったの。それでおじいちゃんも私を愛せなくなるんじゃないかと思ったの」と孫娘は答えた。

今日の子どもたちは、祖父母が子どもの頃に育った世界とはまったく異なる世界で成長している。様々な面で、この世界は確かにエキサイティングで、魅力的な世界だ。コンピュータやジェット機での旅行、電子レンジは、現代の奇跡のほんの一部にすぎない。しかし、否定的な側面もある。環境汚染、犯罪や薬物の横行、高い離婚率は、現代社会の大部分を占めている。孫の世代は、良い物と悪い物との両方の相続人でもある。そして、家族スタイルが変化したことや大きな世帯で子どもを育てることがなくなったために、今日の祖父母は、過去に果たすことが期待されたものとは異なった役割を果たす必要が生じてきている。時には祖父母であり、時には親であり、時にはカウンセラーや親友などの役割を果たす必要が生じてきている。

* 流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

(2019年12月11日受理)

©2020 Center for Promotion of Higher Education

子どもの発達についてのいくつかの基本的な情報と、現代社会で成長することに伴う特有のストレスについての情報とを提供したいと思う。それらの情報は、祖父母である人にとって現代社会特有の役割を果たす上での助けになるだろう。少年期および青年期の成長と発達に関する知識や子どものライフサイクルのそれぞれの発達段階の理解が、若者の行動の仕方の背後にあるものを理解するのにどのように役立つかを強調する。また、家庭のストレスや社会でのストレスが、祖父母にどのような影響を与えるかを理解してほしいし、孫たちが健康で幸福な大人になるために必要な愛情とサポートをどのように提供すればよいかを理解して欲しいとも思う。

以下において論じるものの多くは、祖父母の世代の人々すべてが共有した人生経験を単に確認するお馴染みの事柄である。世界各地の子育てに関する研究から得られた最新の興味深い洞察も提供するので、新しい情報が得られるかもしれない。これらの情報は、孫たちと共に過ごす時間が短期であれ長期であれ、あなたが孫にとってよりよい祖父母になるうえで役立つことだろう。また、今日の親の立場の複雑さや困難と格闘している成人した息子や娘が、よりよい親になれるようにもこの情報を用いることができる。

私たちは、急速に変化する新時代に生きている。家族のサイズは小さくなり、祖父母はこれまで以上に長生きしている。この二つの事実だけでも、祖父母が孫の生活に与える影響は、歴史上かつてないほど大きなものになってきている。そしてあなたの孫たちは、過去のどの時代の孫よりも祖父母であるあなたを必要としている。

それは刺激的で、挑発的な機会だ。人間の成長と発達に関する理解と、成長にとって挑戦となるようなストレスについての知識によって武装し、孫たちがその可能性を完全に開花することを確実にするために多くのことができる。そうする際、あなたは若者にあなた自身の潜在能力をどれほど提供できるか、また提供する際にあなた自身がどれほど成長できるかにも気づくだろう。

幼少年期と青年期の世界

休日におしゃべりしていたときに、4歳の女の子が「神さまには誕生日がないのに、イエスさまには誕生日があるのね」と言った。それは幼児によくある観察の一例で、まったく単純であると同時にたいそう奥深くもある。しかし、彼女の発言によって、神学上の重要な問題を4歳の子どもが理解していると考えるのは間違いだ。要は、幼児は言語的には早熟で、幼児の言語はしばしば実年齢よりもずっと賢く映るということだ。対照的に前期青年期には、知的成長が言語能力よりも先に発達するため、ティーンエイジ初期の子どもは、頭が鈍いと勘違いされることがよくある。ティーンエイジ初期の若者が舌足らずで頭が鈍いように映るのは、単に思考を表現する能力よりも思考力の方が先に発達するためだ。

それゆえ子どもの世話をする際には、知能と個性に関しては、子どもを大人と同じように考えるとしばしば誤解してしまうという事実には注意する必要がある。ティーンエイジャーが言語面で

不器用だとしても知能が劣っているわけではないし、幼児が言語能力に関して優れていても、知的優秀性を意味しているわけではない。子どもの成長と発達に関して幾らか知識を持つことの利点の一つは、子どもたちの知的可能性について過度に楽観的になったり、過度に悲観的になったりすることを防いでくれることだ。少年期の子どもたちやティーンエイジャーは、彼らが使う言語が表しているほど、天才でも愚鈍でもない。

子どもの発達についての知識を得ると、子どもの知的能力に関してより深い理解ができるようになる。子どもたちは文字どおり、私たちとはまったく違った仕方で見ている。時に大人がそれを十分に理解しないなら、知的未成熟のために起こる行動を、子どもの側の悪い動機せいだと考えてしまう。例えば、幼児は自分のおもちゃを誰かと共有することを嫌がるかもしれないが、それを大人はわがままと解釈してしまうかもしれない。しかし、幼児にとっておもちゃは、まだ形成途上のアイデンティティではあるが、「私」および「私のもの」の重要な一部分なのだ。だからもし私たち大人が非常に大切にしている物を誰かと共有するか手放さなければならなくなったらどのように感じるかを考えるなら、子どもが抱く不安を理解できるだろう。問題点は、大人の観点からすれば、おもちゃが「特別に貴重な所有物」とは思えないことだ。

さらに、子どもの発達についてより深く学ぶことから得られる別の価値がある。私たちすべては、かつては子どもであり、乳幼児期、少年期、青年期という発達段階を乗り越えてきた。また私たちすべては、子どものときの人となりや成人期になっても繰り返して持ち続けている。それで、子どもがどのように成長し発達するかということを知ることによって、自分自身の人となりや他人の人となりやを学ぶことができる。自分自身と他人の人となりについて学ぶことは、望めばいつでも止められるが、幼年期の出来事がどのように後々の人生を形作るかの知識を得て自分の幼少年期を再検討することで、大人の人格や個性に対する新鮮な洞察を得ることもできるのだ。

以下において、子どもの発達の各段階の特徴を簡単に考察する。これを知らなければ子どもの知能や人格を間違えて理解してしまうことになりかねない。また、これらの特徴が大人の人格と行動にとって何を意味するのかをも考察する。

I. 乳児期

身体的に有能な赤ちゃんは、知的にも有能だと思われるかもしれないが、必ずしもそうであるわけではない。実際、文化横断的な研究によれば、真実は逆であることが示唆されている。ある文化の子どもたちは、他の文化の子どもよりもかなり早く這うことや歩くことが報告されている。しかし知的能力の面においては、早く這い早く歩いた子どもよりも、ゆっくりと成熟した子どものほうがより優れていた。もちろん、どのような文化であっても、運動能力の成熟率には幅広い個人差があり、おそらく後の知的能力とは関連しないと思われる。

実のところ、乳児の知的能力を評価することは非常に困難である。乳児の知能テストでさえ、

後の知的才能を示す信頼できる予測因子ではない。当然のことだが、後の年齢レベルの知能検査のほとんどは、言語に関係しているが、言語は乳児にはまだ発達していない能力だからだ。

もし乳児が知能に関して私たちに何の手がかりを与えないとしても、気質に関しては確かな証拠を提供する。精神科医のステラ・チェス(Stella Chess)とアレキサンダー・トーマス(Alexander Thomas)によると、新生児には識別できる3種類の主要な気質タイプがあり、それは幼年期以降も持続する可能性がある。彼らはこれらの3タイプを「すぐに満足する子ども」、「気難しい子ども」、「何をするにも時間がかかる子ども」と呼んだ。私たちが乳児に期待するのは「すぐに満足する子ども」だが、そのような気質の子どもは生後数週間以内に、規則的な睡眠と授乳パターンを取得し、新しい状況や人々へも積極的にアプローチをする。対照的に、乳児期に「気難しい子ども」は、数ヶ月間睡眠および摂食パターンが不規則で、新しい人々や状況に対処するにも困難を抱える。「何をするにも時間がかかる」気質の乳児は、最終的には家庭の日課や新しい人々や状況に順応するようになるが、「すぐに満足する子ども」よりも数週間または数ヶ月長く時間がかかる。

乳児期の初期は、これらのパターンは親の個性や気質とは無関係だが、生後数週間のうちに、親の個性が乳児の気質にポジティブにもネガティブにも影響し始める。非常に緊張した親は、すぐに満足する子どもでさえ、幾分心配性で落ち着かない子どもにしてしまう可能性がある。反対に、もの静かで落ち着いたユーモアに富む親は、気難しい子どもでも、非常に有益な影響を与える可能性がある。影響はまた、逆方向にも働きうる。気難しい子どもと対峙した落ち着いた親は、不安になり、動転し、問題のせいで自分自身を非難するようになるかもしれない。他方、すぐに満足する子どもは、過度に心配性で、不安な親を落ち着かせる効果を与える場合もある。

乳児と親の気質タイプの相互作用についてのこれらの調査結果は、容易に識別される気質の違いを間違っただけで解釈されることが多いことを示している。例えばもし、心配性でおどおどしている親から気難しい子どもが生まれるならば、この相互の関係は間違っただけで解釈されやすい。私たちはそのような相互作用が一方向のものと考え、子どもの行動が親の個性に影響を与えるというよりは、親の個性が子どもの行動に影響を与えると考えてしまいやすい。同様に、すぐに満足する子どもは、親が一見したところ努力もなしに容易に育児をしたことの結果だと思ってしまう。しかし、乳児は親から影響を受けるのと同程度に、親の行動に影響を与えることがあるという点は、覚えておく必要がある。

気難しい子どもや何をするにも時間がかかる子どもを持っている親には、「それが子どもの気質であって親が乳児の行動に責任がある何かをしたわけではない」と言って聞かせて、息子や娘を安心させることができる。安心すれば、親は少しリラックスでき、子どもや自分自身に対する要求も軽減されるかもしれない。これは、親子双方が最も必要とするものだ。

希なことだが、子どもがより年長になると、乳児の能力ではとうていできないことでも、子ど

もの動機や意図のせいにはすることがある。そのような間違いの極端な例は、乳児の息子を虐待したティーンエイジャーの母親の事例だ。最終的に、赤ちゃんを実際に数回殴ったことがあったと認められた後、彼女は自分の行動を次のように説明した。「その日は店でひどく嫌なことがあって、お客は行列と価格について不満を言い、支配人は私の作業が遅いと一日中怒鳴っていたの。ものすごく頭が痛いまま家に帰った時に、赤ちゃんが泣き叫び続けていたの。泣き止むように言ったけれども、息子は私の目を見つめて泣き続けたの。息子は私に**仕返しをする**ためにそうしたから、私は子どもを叩いたのよ」。

幸運にもたいていの親は、実際に乳児にそのような動機があるわけではないと分かっている。たいていの親は一度か二度はイライラして怒り、子どもを激しく叩きたくなる誘惑にかられることもあるけれども、普通はその衝動が自分に原因があることを認めて、そのような行動は慎む。

乳児は、私たち自身や他の大人について何かを教えることができるだろうか。ウィーンの医師で精神分析学者であったジグムント・フロイトは、かつて、大人が子どもを魅力的だと思い、子どものニーズに応える理由を説明したことがあった。フロイトの説では、人は成長するにつれて乳児の時の無力さと依存したいという気持ちを放棄しなければならないが、人はこれらのニーズを決して完全には放棄せず、無意識のレベルでは、自分は無力なので世話を受けたいと願望を抱き続けているという。つまりフロイトの説では、私たちが乳幼児の無力さと依存性に応えるのは、それを我が事のように感じて、私たち自身の願望を満たしているのだという。

その説には何の異存もない。私たちすべては人間であり、無力さと依存性は、子どもだけでなく大人の間性の一部でもある。問題は、乳児の無力さと依存性のニーズが非常に強い仕方を持続し続け、大人にとってトラブルとなる時だ。その適切な事例は、子ども時代に、無力さと依存性のニーズを一度も完全に満たされた経験のない男性と女性のケースだ。そのような人は、親になった時に問題に遭遇する可能性がある。彼らは、子どもが独占的に要求する愛情と注目を他の人から得ると、子どもに対して嫉妬や憤りを感じるかもしれない。

幸いにも私たちのほとんどは、子どもがかわいくて魅力的であると認め、自分自身の無力さや依存したいという気持ちをも受け入れて、子ども期にいる子や孫を受け入れ大事にすることができるだろう。

II. 幼児期

幼児の場合、しばしば知能に関して間違っただけの印象を与える可能性がある。**記憶力**はその適例だ。いくつかの点で幼児は、大人よりもずっとよい記憶力を持っている。子どもに物語を数回読んで聞かせた後、幼児はそれを暗記していて、もしあなたが何らかの一語を飛ばして読むなら騒々しく不満を言う。同様に、テーブルの上に一般的な物の写真が映る 10 枚のカードを置き、その後それらを引っ繰り返すと、大人よりも子どもの方がよく覚えている。幼児は、写真の記憶のような、

短期記憶において優れている。

しかし言葉の早熟と同様、幼児の驚異的な記憶力は、知的能力の良い指標とはならない。この並外れた記憶力は、おそらく子どもの方が大人よりも、視覚記憶に保管される干渉情報が少ないという事実からきている。人間は年を取るにつれ、視覚の記憶印象の倉庫がいっぱいになってしまい、見るものを保存したり取り出したりする能力は、雑然とした過去のすべての視覚印象によって損なわれてしまう。

幼児の個性についての印象も、記憶力と同様誤解を招くことがある。未就学児は、自分と異なる観点を持つ別の他人の観点に立つことができない。私の末の息子が4歳の時に歯が痛いと言ったが、「とても痛いのか」と尋ねたところ、「うん、そうだよ。お父さんはそれを感じられないの?」と答えた。私が彼の痛みを感じられないことが、彼には理解できなかった。このため、一般に幼児はペットを残酷に扱うことがある。幼児は、動物が痛みを感じるということを理解できないためだ。(それにもかかわらず、幼児の中には、痛みを理解できない年齢段階でさえ、痛みを感じることができる子どももいるようだ。)

幼児が他人の観点に立てないことを、大人は幼児の知的未熟さではなく、一種の**無神経さ**と誤解してしまうこともよくある。私たちが疲れている場合、幼児に少しの間一人にしておいてくれと命じるかもしれないが、子どもがゲームや物語を読むようせがみ続けるなら、それをその子の無神経さとわがままの証拠と考えてしまいやすい。しかし、幼児は疲れていないので、他の誰かが疲れていると理解することが困難なのだ。もちろん、私たちは子どもに対して、自分は疲れていて休息の時間が必要だと言いつける必要はある。けれども、度を踏み越えてしまって、子どもの主張を永久的で否定的な性格特性と考えるべきではない。

幼児は私たち自身について何かを教えてくれるだろうか。他人の観点に立てないことは、「自己中心性」(J. ピアジェ)と呼ばれる。幼児の自己中心性は、私たち自身が一瞬自己中心的になることについて新鮮な視点を与えてくれる。人間は成熟するにつれて次第に、自分の考え方と他人の考え方がまったく違う場合でさえ、他人の考え方を一応理解することができるようになる。それでも時には、自己中心的なモードに後退することもありうる。

これは、病気の時や重大な失敗をしたとき、または大成功を納めた時などに起こる。そのような場合、私たち自身が大きな感情に圧倒されてしまうので、他人のニーズや感情を認識することが難しくなるためだ。それでも、大人の状況は、幼児の状況とは異なっている。大人はしようと思えば他人の観点に立つことができるが、幼児にはそれができない。大人が自己中心的モードになるのは、知的な理由ではなく感情的な理由のせいなのだ。

Ⅲ. 少年期

子どもが6歳から10歳までの少年期に入ると、彼らの知的能力を学校での進歩、特に学校の

成績によって評価することが非常に多くなる。しかし学校の成績も、しばしば子どもの知的、芸術的な可能性を誤り導くことがある。例えば、シティーコープの会長ジョン・リードは、今では活動的な働きをしているが、少年時代には読解能力の点で問題があり、学校での成績はいつも悪かった。同じような学校時代の履歴をもつネルソン・ロックフェラーと同様に、リードは大人になったとき、知能とは無関係の、脳に関連する視覚障害の失読症を煩っていることに気づいた。

学校時代の業績がはかばかしくなく、実際の知的能力を覆い隠しているような事例は、容易に見つけることができる。アインシュタインとエジソンは、学校時代見込みがないように思えた多くの著名人の一例にすぎない。残念なことに、学校は、独立心の強い独創的な性格をもつ子どもには依然として不寛容なままだ。学校がますますテスト志向になるにつれて、画一性と適合性への圧力が存在する。発見の才や発明の才をもつ子どもたちはしばしばその創造性が塞がれ、学校からは情報を記憶し指示に従うことを要求される。幸いにも多くの創造的な子どもたちは、学校教育の無意味な経験にもかかわらず、彼らの力を実現する個人的な推進力と動機付けをもち続けている。

それで、少年期の学校の成績は、必ずしも生徒の真実の知的、創造的可能性を示す有効な指標であるわけではない。同様に、この期間の子どもの行動も、必ずしも各自の性格を正確に描写するわけでもない。これが真実だと言えるのは、小学校時代に子どもたちが、私が「假定(想像上)の現実」(assumptive reality)と呼ぶものによって導かれるためだ。6、7歳頃に出現する新しい知的能力のために、子どもたちは物の仕組みや原因、結果についての仮説を立てることができるようになる。しかしまだ、事実と仮説とをチェックする能力に欠けているために、しばしば事実よりも仮説のほうに信頼を置いてしまう。

幾つかの例を挙げると、「假定の現実」に含まれる事柄が幾分具体化し理解しやすいかもしれない。私たち家族がボストンに引っ越した時、次男は10歳だった。彼はやっと自分の部屋を持てるようになり、自分の持ち物を片付けていた時、誰もが聞こえる声で「誰かが僕のセーターを盗んだ」と叫んだ。それは使い古した彼のお気に入りだった。母親はすぐに、箆笥の一番下の引き出しにあるだろうと説明した。しばらくの沈黙の後、再び彼が叫んだ。「きっと、僕のセーターを盗んだ人がそれを戻したんだ」。彼は事実と適合するよう「假定の現実」を変えるのではなく、逆に事実を「假定の現実」に合わせた。

「假定の現実」は、しばしば嘘と間違っ**て**認識される。厄介な状況に陥った場合、子どもは自分の防御になると感じる「假定の現実」となる物語を作りあげることがある。おもちゃを「私」の一部と考える幼児と同様、学齢期の子どもは、「假定の現実」を闘争なしでは放棄できない個人の創造物と考える。それは必ずしも若者が架空の物語を信じているということではなくて、それが「自分の物語」であるということに過ぎない。子どもにとっては、真実を擁護するよりも偽りの物語に固執する方が、プライドを守る点でより重要なことなのだ。嘘をつくことに関しては、

少年期の子どもは、大人が考えているのとは違う意味を持つということを覚えておくのは良いことだ。

私たちの孫が、わざと作ったとわかる物語を言ってくる場合、私たちにできることがいくつかある。一つは、子どもを真実に直接対峙させることだ。二つ目は、口論をするよりも単に物語に沿って進めることだ。三つ目のアプローチが、しばしば最も効果的だ。その話は本当かもしれないが、私たちにはそのようには思えない、人間誰しも間違えるものだ、いったい誰が正しいかなんてどうすればわかるだろうか、と子どもに言うことだ。このようにすれば、人格の問題から離れて、意見の相違を客観的な問題とすることができる。また、真実についての衝突に対処するための効果的な戦略についても、子どもに教えることができる。

子どももまた、間違えることを好まない。少年期の子どもは、私が「認知的独断」(cognitive conceit)と呼ぶ、自らの知的能力に対するある種の絶対的な信念を持っていて、それが魔法のように、物事に対する批判的アプローチや彼らの能力についての何気ない主張の基礎となっている。8歳の子どもが「僕はもう核分裂のことを知っている」と私に話したことがあるが、子どもが「仮定の現実」や「認知的独断」を示したとしても、知的早熟さや感情的成熟として考え誤ることがないようにする必要がある。

例えば、ある子どもが私たちに、家に一人で居ることになっても全然困らないと話すことがあるかもしれないが、実際は多くの研究が示すとおり、子どもは恐れを感じている。同様に、子どもたちは毎日の生活での不愉快な現実を否定し、それらを「仮定の現実」とすることによって、トラウマにならないようにしている。頻繁に酔っ払って虐待をする父親を持つ子どもは、父親を勤勉で思いやりのある父親として描写することがある。ある面では子どもはこの描写を信じているが、父親が酔っ払っている時のような別の面では、父親の現状を注意深く閉め出している。子どもが知的、感情的な能力があるかのように主張したとしても、潜在的な恐怖や不適切な感情が隠されているという事実には用心深くあることが必要だ。

「仮定の現実」と「認知的独断」は、大人の間でも起こりうる。しかし、繰り返しになるが、成人した大人の場合は、子どもの場合とは異なる意味あいを持つ。大人の場合は、「仮定の現実」を体系的な仕方で判断するのに必要な知的能力を持っているが、子どもの場合はそうではない。大人においては、「仮定の現実」が劇的な逆転となることもしばしばあるが、子どもにおいては、そのようなことはあったとしても、めったにない。例を挙げると、ある男性が「仮定の現実」の印象を受けたとしよう。最初、ある女性と会って好きになり、その人をすべての点で完璧な人と思い、その人のためにはどんなことでもしてあげられると感じる。当然のことだが、次第に欠点を発見し、「仮定の現実」が完全に逆転し、以前には悪いところを見つけることができなかったが、良いところが全然ないとさえ感じるようになる。

そのような状況では、「仮定の現実」の創作者の対象であり、事実上以前と全く変らないその女

性は、自分がしたことやしなかったこととは無関係に、相手の男性の対応が劇的に変化するので当惑する。もちろん、こういうことはよくあることだ。変化すべては、「仮定の現実」の創作者の頭の中で起こったものであり、その対象者の行動とは何の関係もない。対照的に、子どもの場合は、そのような急激なスイッチの変化は起こらない。なぜなら、彼らには、「仮定の現実」をテストするために必要な大人の知的能力が欠如しているからだ。飲んだくれの父親を持つ子どもは、少なくともその子が青年期になるまで、父親が勤勉や思いやりがあると信じている。

IV. 青年期

若者が思春期を通り抜けると、彼らは身体面だけでなく精神面においても大人になる。大人への精神面での移行は、身体面での移行よりも難しいことがある。大人の精神を持って生きるとは、大人の身体を持って生きることと同様に、十分に慣れることが必要だ。青年期になると若者たちは、異なる考えを同時に抱くことができるようになる。例えば、彼らに何か簡単な質問を試みると、考えられる様々の答えを述べることができる。単純な事実で返答する場合もあれば、空想的な答え、嘲笑的で軽べつ的な返答、または虚偽の答えをする場合もある。これらいくつかの可能性の中から一つを選ぶことは、いつも容易であるわけではない。このことはしばしば、ティーンエイジ初期の若者が優柔不断で判断を停止しているかのように思える理由の説明となる。

ここで再度、若者の意思決定の難しさを、知的遅れの証拠と誤解しないよう私たちは注意する必要がある。実のところ、それはまさに正反対だ。若者はとても聡明なので、しばしば鈍いように見える。彼らは非常に多くの可能性、尋ねられる非常に多くの質問について、返答すべき非常に多くの答えについて考えることができるが、最も適切な選択をするための経験が欠如している。経験を積むことで、彼らは質問と答えに優先順位を付けることや、社会的に受け入れられる方法で反応することを学ぶようになる。

青年期の子どもたちは、彼らの人格や個性に関して誤解を招くような手がかりを与えることがある。例えば、多くのティーンエイジャーは、しばしば幾分偽善的であるようにも見える。彼らは最も理想主義的な価値観や関心を支持するかもしれないが、よく言われるように、自分で言ったことに対して実際の行動で裏付けをする、ということがほとんどできない。知人のティーンエイジャーは、ビアフラ(ナイジェリア東部の地方。1967年に独立宣言をしたが悲惨な内戦ののち70年に鎮圧された)で飢える人々について何もしない大人を激しく非難した後、彼の一週間分の給料全てをロック音楽に費やした。彼は、自分の言葉とビアフラの子どもたちのための食物支援プログラムに寄付をするという実行可能な行為との間の関係性は何も見いだせなかった。

しかしながら、これは「擬似偽善」(pseudohypocrisy)としか言いようがないと認識することが重要だ。ティーンエイジャーはまだ、理想的なことを言明または表明してさえいれば、理想のために働き、実現することと同じだと信じているような発達段階上にいる。彼らはまだ、理想を表現

する能力と理想を実現する能力との間には大きな違いがあるという難しい教訓を学んでいない。そして彼らが大人を偽善的であるとみなすのは、この二つの間の違いを完全には理解していないからだ。若者はより多くの経験を積むにつれて、理想のために声を上げるというエスカレーターに乗るような容易さと、目的を達成するために自己犠牲を払い懸命に働くことが要求される、エベレストに登るような努力との違いを真に認めることができるようになる。

思春期の子どもの擬似偽善は、大人の間では未知のことではない。すぐに思い浮かぶのは、貧しくて公民権を剥奪されている人々のためにいつも迅速に声をあげる大人たちだ。しかしこれらの大人は、貧しい人々を助けるために税金が使われることに激怒する人々でもある。

子どもの発達についてより理解することによって、私たちは子どもの能力や性格についてより正確に評価できるし、私たちが彼らの面倒を見る時に、子どもに対してより支えになることもできる。私たちはよりよい祖父母、よりよい友人になることもできる。子どもの発達の理解により、自分自身や成人した子どもたち、および他の人々についての有益な洞察も得られるだろう。

注、David Elkind, *Grandparenting : Understanding Today's Children*, Scott, Foresman and Company, 1990. から序論と1章を翻訳。